

供は時々お父さん僕は何處から生れたのと聞く、若し自分のことを聞かないでも妹なり弟なりが生れたとすれば、何處から生れたの、何うして生れたのと不思議に思つて尋ねる。此問ひに答へる時に、日本では木の股から拾つて来たとか、川に流れて来たのを拾つたとか、道に捨て、あつたのを拾つたとか云ふと、私を捨てるなんて酷いことをする人があるものだと思ふ。西洋では鳥が咬へて来たとか、お醫者が持て来たとか答へるが、いづれも嘘を言つて居るのでいけない。然らばどう答へるのが善いか。其の答は斯うあるべきだ。まづ豆の種子を蒔け、其の種子から芽が出て青い葉が出て實が出来る。即ち種子から新しい生命が産れるでは無いか、或は又卵を雞が暖めると雞が出て、やがて立派に育つ。あの卵から新しい生命が造られるのである。斯う云ふ準備をした上だ。さて愈々言つて聞かせる、「これはお母さんがよく知つて居る、お母さんがお前を生んだのであるからお母さんより外に誰も知らない、お母さんはお前のやうな可愛い子を欲しいと思つたか、神様に願つて種子を頂いて、其の種子をお母さんの體の中に入れて、さうして大切に育てた、段々大きくなつて、もう外へ出してもお乳を呑めるやうになつたから、もう大丈夫と

思つてお母さんの體の外へ出したのである」と、斯う物語るのである。これだけで澤山である。何故かと云へば、子供はそんなに難かしいことを聞くのではない、決して大人の思ふやうなことは考へては居ない。私の宅の四歳になる子供が女中に抱かれて小水をして居る、女中に向つて、「お尿は何處から出て来るの」と聞く、「坊ちゃんのお腹にあるのですよ」と答へたら、さうと云つて、笑つて居た。それで宜い。お母さんのお腹から出たと云へば充分である。それだけ聞けばそれ以上のことは聞かない。

米國の或婦人がお産をして嬰兒を傍に置いて寝て居つた。すると五歳の兄が室に入つて来て驚いて、赤ん坊が居るよ、お母さんどうしたのと聞く、彼方では日本人見たやうに露骨なことは言はぬ。婦人は腹から下のことを言ふのを無禮としてある。で、身體といつて、お腹とはいはないのである。話を聞き了つて「それでは僕もお母さんがさう云ふ風にして生んだのですか」と聞く。お母さんは「お前のやうな可愛い子をもう一人欲しかつたから、神様から種子を頂いて育てた、もう口も鼻も目も耳も、立派に一人前の子供になつたから、お母さんの體から出した。其の



爲にお母さんは此様に青く瘦せて居る、私の肉と血で骨を折つて育てたのだ」と云つて聞かせる  
と、「それでは僕もさうなんだからお母さんは大切だ」と云つて抱きついて接吻して今までに無い  
親愛を示したといふことである。其の時に立會つて居た産科醫が之を見て感心をして、實に好い  
教訓をしたものだ、成程子供が生れたと云ふ解釋は是で澤山だ。母を愛すると云ふ念慮が其時に  
發生したので、親子の間の關係を一層親密にしたと云つて感心した。それが書物に書いてある。

それだけのことは家庭に於て子供に話して聞かせる。質問しなければ、親の方から言ふ必要があ  
る。それから小學校へ行く前になると、種々子供に注意する。其の注意の一つとして「友達が君  
は何處から生れたと云ふかも知れぬ、或は車夫などが聞くかも知れない。其の時に前は斯う云  
ふ風に答へなさい。』生れることはお母さんの外に誰も知つて居る筈がない。君は子供だから矢張  
り知つて居る譯はない。僕はお母さんに聞いて知つて居る。君も家へ歸つてお母さんに聞きな  
さい」と云ふのです」と云つて置く。是はいかにも旨い教訓で、お母さんの外の人の言ふのは、總  
て嘘である。此の位確かなことはない。此の教育が家庭でやつてあれば、家に來て體裁の悪いこ

とを言ふことに就ての心配は全く無くなる。

さて又少しく大きい子供は、お父さんのことを質問する。お父さんはどうして家に居るのと聞  
く。其時には鳥の例を引く。「雌鳥が卵を抱いて居る時に、雄鳥が番をして居る。雛が出来ると雄  
鳥が保護をして居る。それと同じことで、お母さんが安心して自分の子供を生み、安心して子供を  
大きくすることが出来るやうに、お母さんを大切にして下さる人が必要である。其の爲にお父さ  
んが來た。お父さんが居なければお母さんにはそれだけのことは出来ない、何處のお母さんにも  
皆お父さんがある」。斯う云ふ風に話せば、子供としては充分に了解する。餘程の程度まで眞理で  
あるから、大きくなつても親が自分を騙したとは思ふ氣遣はない。



## 第十五章 家庭の環境

### 第一節 幼時の経験は生涯を支配す

「三つ子の魂百までも」と云ふ諺は、無論遺傳の影響を説いたものと思へるが、亦幼時の経験が生涯を支配する場合を言つたものとも言へる。最初の記憶、言換へれば幼時の経験で、後日まで記憶に残つて居る事柄は何歳の折のことかと云ふに、多く四歳以後の事柄である。四歳以前の経験は記憶として回想することは出来ないやうである。併しながら、其の以前の経験といへども、吾々の精神活動に全く無關係だといふことは出来ない。心には意識的の働きばかりでなく、無意識的の働きもある。即ち顯在性の意識と同時に潜在性の意識がある。幼時の経験は成長と共に其の人の潜在意識を造つて居る。其の潜在意識が強い底力となつて、顯在意識を動かして居る。此の事實は精神病患者に就ても實驗が出来、催眠状態にある意識に就ても證明が出来る。更に又

各自自己の精神分拆を行ふことに依つても知れる。彼の趣味の如きものは、幼時に於ける周囲の状況に餘程影響される。音楽を好むとか、自然を愛するとか或は賑やかな場所を好むとか、云ふやうなことは、皆此時に養はれて行くやうに思ふ。或は書物を大切にする、物品を丁寧に取扱ふと云ふやうな善心の芽生も、此時に養はれて居る。他人に對する社交的態度と云ふやうな事或は飲食物を節約し、遊戯の適度にすると云ふやうな常識も亦此の時代に養はれて居るやうに思ふ。要するに所謂判断の力、もつと正確に言表すれば、良心の判断とか趣味の判断とか直覺の判断と云ふやうな理論の道を辿らずしてする判断は、成長後に種々なる研究力に依つて修正されることがない、否修正されることがないから、子供の時の儘を生涯持越して行く譯である。是が幼年時代に於ける教育 最もデリケートな點で、又最も大切な所以である。

之に就て私には種々の實際上の経験が有る。私の過去を考へて見るのに、片田舎に生れた爲に自然を楽しむと云ふ外には、何一つも娯樂がない。その影響として音楽を聞いたことが、いから、田舎を出て後は屢々音楽を聞くべき機会が多かつたにも拘らず、音楽に關する趣味は全く養はれ



なかつた。それから又極く静かな所で育つた爲に、成人後都會に何十年と居るけれども今日尙都會の騒々しい生活が、どうしても面白くない。此等を細かく分析して、その理由を温ねて見るに性格や、又父母の遺傳ではなくて、全く幼時の環境の影響の然らしめたのだと云ふことを自分で調べ出したことがある。

## 第二節 山村か漁村か都會か

そこで子供を育てるには、何う云ふ所が一番良いかと云ふことが問題になつて来る。山村か漁村か、それとも都會か。山村は極く静かで空氣が好くて自然の大きな心に抱かれて、自然の變化に直面して育てられて居る點から見れば、山村は最も教育的だと思はれる。併し又人間の努力奮闘的態度と云ふやうなものは、却て漁村の方が養はれ易い。海の大活動、それと戦つて居る漁夫の奮闘、そして空氣が清くて子供の烈しい遊びをして心身を鍛へるに適して居る。而して又食物が脂肪蛋白質に富んで居るものを得易いのも、漁村の利益である。けれども漁村は騒々しくて小

さい子供が落着いて居ることが出来ない、深く物を考へると云ふやうな性質は此處に於て養はれることは出来ない。哲學者は決して漁村からは出ない。さて又都會になると、空氣は汚がれて居り、動植物を始め天地山川の自然の教材が甚しく缺乏し、少くとも一方に偏して居る。其代りに人工的の事柄は非常に豊富であつて、種々なる施設が到る處に行き互つて居る。一方から見ると騒々しいけれども、亦其の缺を補ふ意味に於ては豊富な現代の文化が集つて居り、現代の世相を能く紹介して居る。科學を研究する場所は都會であると思ふ。斯う考へて行けば、山村にも、漁村にも、都會にも、夫々長所が有るけれども、子供の心身の發達程度から考へて見ると、山村を以て最も適當とする。其の理由を言へば斯うである。そもく個人の生涯は人類歴史の全頁を繰返して居るものである。

上古野蠻時代に於て人間のした事柄を、今日子供が繰返して居り、近代の文明人にして居る事柄を今日の成人が繰返して居る譯である。して見れば野蠻時代の人々が生活して居つた生活振が最も子供に適する譯である。野蠻時代の人は食物を得る爲には海岸にも出たけれども、朝夕安じ



て生活して居つた場所は矢張山の麓である。其の點から考へても、子供は山に適した譯であるし、又極く野蠻時代に於ける生活は所謂戦争と漁獵と云ふことであるけれども、稍々進んだ時代に於ては農業が一般國民の生業となつた。其の點から見ても、山村が子供の心に適つて居る。稍々長じて小學校の中級に進む頃は餘程活動的になつて来る。その頃から徐々山村を去つて漁村に出るのが適當である。漁村は其時代から最も特色を發揮して盛んに運動を興へ、又種々なる海濱特有の知識を供給する。中學校以上になれば、都會も亦極めて彼等の精神發達に適したる状態にあるものと云つて宜しい。

### 第三節 家庭の教育的施設

そこで各自の家庭の教育的設備と云ふものを考へよう。山村から漁村へ、漁村から都會へ移住することはさう容易く出来るものではない。さうなれば勢ひ、家庭及周圍の設備を完成することに依つて教育上の缺陷を補ふことが必要になつて来る。さて家庭の教育的設備と云ふやうな意

味から今日の家庭を見ると、都會は都會の弊害に陥つて居るし、又郡村は郡村の弊を有つて居る。家庭は何うしても靜かでないならばならない。此の點から見ても山村漁村に就ては不足を言ふところも無いが、都會になると、非常の缺陷を有して居る。そこでどうしても子供を育てる場合には、市の眞中に於てすべきものではない。必ずや營業の場所と生活の場所とを別にすべきものである。即ち營業家屋と安息家屋と云ふものを別にすることが最も必要である。

次に家庭の設備は多様に互り變化性に富んで居らなければならぬ。此の點から見ると田舎の家庭は單調に失して居る、然るに都會の家庭は相當變化に富んで居ると云ふ利益を有つて居るけれども、多くの家庭は庭園も無く樹木も無く、又兒童各自の部屋もないと云ふのが一般であるから、これでは都會の恩澤を十分に享受することが出来ない。若し安息家屋と營業家屋を併有すれば此の缺點も少くなる譯である。さて又子供の爲さうしてもなければならぬものを考へて見ると、先づ子供には動植物及び天地山川の現象と直接面接することの出来るやうな機會を興へることが必要である。自分の家に庭がなければ其の附近にある公園或は神社佛閣を利用すべきである



が、庭園に就て言うて見れば、従來の如き築山式ものを廢して全く芝生の庭にするか、若くは林の庭に代へて欲しいと思ふ。其の庭に植ゑられた木が従來は花物か或は常磐木に限つて居るけれども、之を花物が若くは果物に代へてしまひたいと思ふ。さうして四季を通じて常に花が咲いて居り、又四季を通じて常に果物が實つて居るやうにしたいと思ふ。

それから日本の國は家畜業が一體に進歩して居らない。これは子供の時から動物に接せしむる機会が少い所から起るのであつて、動物愛護と云ふ心は小さい時から動物を飼はせて見ることをしなければ、養成することは出来ない。そこで庭には鳥を飼ふとか、或は山羊を飼ふと云ふやうなことをして欲しい、牛とか豚とか云ふものは飼ひ憎い。鳥は小鳥でも宜し、又矮鶏でも宜し、普通の鶏でも宜しい。山羊は極めて飼ひ易い動物である。兎も之に次で飼ひ易い。日本の公園と西洋の公園とを比較して見て、直ぐに區別の出来るのは、西洋の公園には大概鳥や栗鼠のやうな動物が居る。然るに日本の公園には動物は全く居ない、魚類が飼つてある位のものである。是が著しく違つて居る點である。次には西洋の公園は運動が出来るけれども、日本の公園は見るだけで

運動に不適當である。各自の庭にしても其の通りで、築山式の庭では全く運動することが出来ない。故に芝生か木立にして其の間で子供が運動するやうに直すべきである。すると茲に一の疑問は各自の小庭では運動など出来ないではないかと云ふ議論が起るが、此の點に就て私は思ふ、都會に於ける住宅の庭園は隣り近所合同すると云ふ方針を採つたらどうかと思ふ。例へば、甲の家に二十坪の庭があり、乙にも二十坪の庭があり、丙にも二十坪の庭があり、丁にも二十坪の庭があると假定した時に、各々二十坪宛では何等運動の爲にもならぬが、其の四軒は東西南北に家を建て、其の中央を圍つて八十坪の庭を拵れば、相當子供の運動場が出来る。さうしたら此の缺點を補ふことが出来はしないか。庭園もこれだけの廣さになれば一方に於ては、教育の資料を十分に供給し、他方に於ては運動の機会を充分に與へることが出来る。公園の設備が不完全なる日本に於ては、斯う云ふ點に思ひを致すべきだと思ふ。

それから、兒童に部屋を與へ、其の部屋に於て種々研究と運動との機会を與へると云ふことも亦必要である。兒童の部屋はどう云ふ風に設計すべきかと云ふことは、教育者間にも相當研究さ



れて、かつては發表されたこともある。要するに、人事自然凡ゆる事物を兒童の面前に提供するやうに組織する。自然は其の儘でも宜しい、人事は之を簡單に直して、其の室に備へ付ける。それから狭い場所を利用して出来るだけ運動の機會を與へる。運動の種類は各自の家庭に相應して夫々考ふべきである。庭園と公園、此二を兒童に與へると云ふことは、今日の家庭に於ては殆ど考へられて居らない。庭園は年寄の樂む所、又兒童の部屋は只兒童の惡戯をする場所、どんなに汚くも構はない。子供を追ひ遣つて置く牢獄と云ふやうな考で設計されて居るが、これは非常に間違である。前にも云つたやうに家庭の本體は兒童を教育する場所であるとすれば、家庭の庭園でも部屋でも兒童本位に立案されて居なければならぬ。經濟上の困難の爲に出来ない者は別として、出来る人が之を考慮しないのは甚だ遺憾なことだと思ふ。

## 第十六章 模範的社會生活

### 第一節 國家生活の模範

家庭には親と子と云ふ關係があり、或は祖先と子孫と云ふ關係があり、或は主人と婢僕と云ふ關係もある。さう云ふ點から見ると、家庭は差別階級であつて、上下主従の一階級的社會と見ることが出来る。そこで家庭に於て能く上長の命令に服する訓練を與へたならば、他日成人の後に忠君愛國の精神を養ふことが出来るに相違ない。忠臣は孝子の門より出づ、支那人が斯う考へたのは此の點に着目したものである。此の點から見ると、家庭は一個の國家生活の模範であると云つて宜しい。何故模範と云ふ字を使つたかと云ふと、國家に於ける上官と下役との關係は勿論權力の關係であつて、決して心服と云ふ關係ではない。權力に依つて壓迫され、嫌々ながらそれに服従して居る。其の關係も全く不必要ではない。今日に於ても或意味に於て必要である。併し



ながら若し其の關係に、精神的に服従すると云ふ意味を加へ、或は恩義に感じて服従すると云ふ意味を加へたならば、それは最も模範的の國家組織と言はなければならぬ。日本の國家組織がさう云ふ組織だと言はれて居る。それは丁度父母が兒童に對するやうな關係である。一方に於て權力の關係があるけれども、而も子が親に服従するのは、其の恩義に感じて服従するのであり、親が子に命令するのは子供の將來を祝福し、其の人格を造らうと思つて命令して居るのである。是れ家庭が國家生活の模範であると云ふ所以である。斯ういふ訓練が適當にされて居る子供は、能く秩序を重んじ國權國法に従ふ良習慣を養つて居るに相違ないのである。

## 第二節 民本制度の模範

家庭は又一方から見ると、一種の民本制度の社會である。夫と妻とは全く同等同格のものであつて相互の間に上下はない。尤も日本の現代はまだ上下がある場合もあるけれども、併しながら子供の意識に於ては、父親が上で母親が下だと云ふやうなことはない。さう思はせるやうに古い

家庭はもうなくなつて居る。外形の上にて多少夫の方が上にあるやうに見えて居る家庭もないではないが、子供の意識から考へれば殆ど同等のものである。同等であり、又對等でなければ、理想的の家庭とは言へない。又兄弟と云ふものは生れた年月に前後があるだけで極めて平等なものである。子供を愛する親は決して此の兄弟の間に差別といふものをつけない。昔は長子に一切の財産を譲り、家督權を譲つて、長子が父に代つて一家を支配すると云ふやうな制度もあつたけれども、今日に於ては、殊に知識階級に於てはどの兄弟も皆同じやうに取扱はれ、又同様の教育を與へられ、兄弟が三人なら三人とも皆同じやうに菓子を惠まれ、同じやうに玩具を與へられて居る。それを生れた前後に依つて階級を付けやうと思つたのだが、古はいざ知らず、今日では實際上不可能のことであらう。されば同じ取扱をして居ると云ふことが、何れの家庭に於てもそれが本當の状況であらうと思ふ。

さう考へて行くと、家庭は一方から見れば、實に平等の國であり、平等の社會である。若し其の家の人々が心懸けの良い、或は又現代的の家庭であれば、其の使用人に對しても同じに取扱つ



て居るのである。さうなると家庭は一個の共和政體のやうなものであると云ふことも出来る。共和政體に於て各自が兎もすると銘々の利益を主張して調和を缺くことがある。然るに家庭と云ふものは、元々人情に依つて結び付けられてあるから、如何なる問題が起つても家庭の平和を害するとか、調和を害すると云ふやうなことは起らない。即ち子供は父をリーダーとして其の命令に従つて行き、又一番大きな兄をリーダーとして其の言ふことを聞く。一體共和政府に於ても矢張り頭と云ふものがある。只專制政治の頭と違ふ所は、專制政治に於ては頭ら自らが豪いから頭だぞと宣言したに對して、共和政治に於ては皆があの方は豪い方だよと云つて、それを戴いたと云ふ迄に過ぎない。家庭に於ては親子の關係なり、夫婦の關係なり、或は兄弟の關係なりに於て、一方を尊敬する時は皆が自分達よりはえらい、自分達の利益を圖つて呉れる人であると思つて、其の命に服して居る。斯う云ふ意味に於て家庭は民本制度の模範と云つて宜からうと思ふ。

### 第二節 理想生活

理想的の社會生活と云ふのは、一箇どんなものと云へば、差別と平等との兩面がある。全く平等の社會も理想的でない。差別のみによつて平等のない社會も亦理想的ではない。差別あり平等あり、服従あり、協同あり、命令あり、一致ありと云ふやうな社會組織が眞の理想的である。そこで家庭と云ふものは能く其の本質を考へて見ると、理想的の社會組織と見るべきものである。然るに、家庭の此の本質に着眼せずして、或は家庭は單に專制政治の場所である如くに考へ、只人情的に成立つて居るもの即ち組織のない雜居のやうに考へて居るなどは、甚だしい間違である。若し家庭が斯の如き理想的の社會生活であると見たならば、此點を最も能く發揮することを考へる必要がある。

早稻田大學の安部教授が會て「子供本位の家庭」と云ふ書物の中に論じて居つたのは甚だ面白い。其の内容を言つて見ると、家庭生活と云ふものは國家生活の反映である。又家庭生活が國家生活にも反映する。そこで國家は立憲政治の國家であるから、家庭も從つて立憲的にならなければならない。然るに家庭は非常に專制的で宜しくない。そこで專制的の惡風を打破する爲に、夫婦



兩本位にいなければならぬ、夫が妻に命令することもあり、妻が夫に命令することもある。夫婦は對等であると云ふことにする必要がある。又子供の意見も相當に尊重することが必要である。それ等の美風を養ふ爲に、家庭に於て家庭會議を開くが宜い。即ち一ヶ月の支出計算にしても、一年間に於ける一家の經濟的方針にしても、亦家庭の日常生活のやり方に就ても、家庭會議を開いて總て輿論に決するのが最も宜しい。其の場合の議長は父親であつて、家中の者全體が議員になり、各自に自由の意見を發表せしめ、其の可否を採決する場合には各自に一票の權利を與へ、而して多數決に依つて一家の行政方針を定めて行くことは非常に面白い。斯う云ふ風にするに依つて、各自の人格尊重、どんな子供と雖も尊重しなければならぬと云ふ精神が養はれ行くし、一家の問題に對しては、どんな子供と雖も亦相當に考へなければならぬと云ふ共同の精神、或は責任の觀念を養成し、又老人や主人は自分の我意を徹すと云ふことが宜くないと云ふことを、熟々了解せしめ、又子供は自分達の考の足りない點が非常に多いものであることを反省する機會を與へる。此の家庭會議と云ふものは誠に面白い組織である。私も試みたこともあるが、非常

に興味があつて、一家のことをする上に於て、和氣霽々の間に種々な問題が決定されて行く、さもなくば子供が我儘を言つて困まる所を合議輿論である爲に、子供心にも輿論と違ふことが分れば、不平を言はずして自分で其の要求を撤回した例などがあつて、非常に面白いやうに感ずる。

#### 第四節 社會改善の出發點

さて家庭を専ら文化生活と云ふ點から眺めて見ると、家庭は凡ゆる文化生活の出發點である。此處で試みて出来ないことは、何處に於ても出来ない。縦んば公衆の間に於て出来ることであつても、家庭にまで滲み込んで行かなければ本當の効果は現はれない譯である。故に家庭と云ふものは種々の科學の應用場であり、適用の場所である。今日日本の家庭生活は非科學的であつて、改良すべき點が多々ある。又舊來の陋習に捉はれ、無意味の生活、無駄な生活が甚だ多い。此等を改善する必要が疾くに叫ばれて居るが、其の叫び聲が最も能く聞かれて、改善の實が擧つて居る



のは、學校とか會社とか或は役所であつて、家庭の生活に於ては殆どまだ徹底して居らない。處が、此の家庭生活に於て徹底して居らぬところから、學校會社役所に於ける改善も只一時的の改善に止まつて、有終の美を見ることが出来ない。何時の間にか燃りが戻ることになる。然るに其の改善が家庭にまで入ることになれば燃りの戻らない、眞の改善實績を擧げることが出来る。家庭は總て生活改善の出発點であると思ふ。家庭の生活改善が實行されるまでは、到底公衆の場處の生活改善は見込がない。一時改善される姿を現はしても亦燃りが戻るものである。

此の點から見て、家庭は大變に大切であるが、其の改善が又兒童に及ぼす影響にまでも考へ及べば、猶ほ一層深い意味があるやうに思ふ。即ち幼年時代から因習に捉はれない、現代科學の粹を應用した生活に子供を慣らすと云ふことは、將來日本の家庭生活の改善、社會生活の改善の上に最も強い力を與ふるものではないか、一例を禁酒にとる。酒を飲むと云ふことが害になることは段々認められて、宴會等に於て酒を出さない習慣が餘程多くなつて來た。處が、それが改良されて居ても晚酌と云ふものは、今でも認められて居るやうである。晚酌が認められて居つて、毎

日親が飲んで居る所を見せつけられて居る子供は、世の中に禁酒の聲を聞かない場合には、直に飲酒を初めるかも知れない。然るに親が家庭に於て晚酌をしないと云ふことになれば、子供は初めから酒の害あることを知り、否酒は飲むべきものであると云ふことすら知らないで育てられて來る。さうなれば縦んば社會に出て酒宴の席に列しても其の酒を飲むべきものであると云ふことすらも知らない。飲んでおいしいと云ふことも知らぬのであるから、禁酒の罪を犯すことは無論ない譯である。私は此の點から酒を常用して居る人に向つて常に注意する。長い飲酒癖に陥つて居る者は、自分の絶酒は六ヶ敷からうが、せめて少しく注意して出来るなら子供に飲酒の様を見せないで欲しい。子供に見せないで飲むやうにしたい。それにはどうしたら宜いか、子供に見せないやうに飲むのは餘程難かしい。夜十時過ぎに飲むことにするより仕方がないと思ふと説く。多くの人は之を冗談として聞いて居るか知らぬが、此等の注意は決して冗談ではない。子供の將來を思ふ爲に是非必要なことである。若し夫れ酒は必要であると考へて居る連中に至つては、又更に他の方面から説くのだが、こゝに禁酒論は只一の例に述べたのに過ぎない。



## 第十七章 兒童の發育標準

### 第一節 心身の關係

我々は生きて居る、これを内面から見れば心の働きで、外面から見れば體の働きである。心と體とは畢竟一物の二面である。即ち



されば體を離れて心は無い、又心を離れて體は無い。生理活動は心理活動と伴つて存立する。決して孤立しては存立しない。ギリシャ人は夙に此の點に着眼して體の美しいのは心の美しい證據、身體の圓滿なのは心の圓熟な證據として體育に没頭した。ローマ人も亦此の點に氣が着いて「健全な精神は健全な身體に宿る」と言ひ慣らして居た。甲は病身でありながら、其の性格は健

全だ、之に反して乙は健康でありながら其の性格は病態だと言ふことはある。併し、同一人について、健康の時よりも病氣の時の方が性格が圓滑になつたとか、病氣の時よりも健全になつたら、性格が病的になつたとか言ふことは更に無い。甲と乙との場合は所謂個人差の問題で、原因が數多くなるので右のやうな矛盾も生じて來るのである。同一人の場合は原因が單一だから、何の撞着も生じないのである。

さて又心身は相伴つて存立する以上は、其の發育も亦相伴ふものたるや自明の理である。さるを、世間には體の發育を圖ることを忘れて、心の發育ばかり圖らうともかくものがあるが、葉を枯して幹を太らせようとする類で、全く以つて御話にならない。

とは言ふものの、此處に一個の疑問が起る。元來身體も精神も複合體では無いか、そして各部の發育は常に足並を揃へて進んで居らないでは無いか、して見れば身體のどこの部分の發育と精神のどこの部分の發育とが平行して居るのか、又身體のどこの部分の發育と精神のどこの部分の發育とが逆行して居るのか、と言ふのである。



いかにも身體の各部は歩調を揃へて發育するものではない。即ち同一の比例で發達するものはない。フィアオルトの研究によると、各器官は誕生より成人に至る間に次の割合で重量が増加すると云ふことである。

精	六〇倍	筋	四八倍
腺	二八	骨	二六
肺	二〇	胃及食道	二〇
脾	一八	肝	一三、六
卵	一三	心	一一、五
腎	一二	皮	一一
唾	一〇、七	存	七
甲	四、五	腸	三、七
眼	一、七	腎	〇、九
胸	1/2	腦	

肺と胃と脾とは身體全體の發達と略同じく、精養と筋肉は遙かに其の上に出で、胸腺と眼とは遙かに其の下に居る。前表以外の器官には少しも發達しないで、成長と共に消滅して了ふものさへある。總じて絶えず發達する部分は甚だ稀であるが、部分によりては生涯發達して居るものもある。例へば腎臟は三十歳まで、筋肉、骨髄、腸、肝臟は五十歳まで、心臟及肺は八十歳まで發達をつゞける。

精神の各機能も歩調を揃へて發育するものではない。感覺や記憶の如き、其の働きは年少時代に旺盛で年齢と共に衰へる。智能の如きさへ多くの人は十四五歳で中止して了ひ、十七八歳以後まで發育する人は稀である。之に反して聯合力の如き推理力の如き幼時には其の働き極めて微弱であるが、年と共に發達し來たつて、人によつては成年は勿論、老年に至るも尙發達を中止しないものがあるらしい。

さて斯うなつて見れば、心と體との發達は平行すると言つた原理だけでは不十分である。心のどの部分と體のどの部分との發達が平行するものか、進んで之を確かめなければならぬ。これを確



めなければ、此の原理は教育上に適用出来ない。今假りに智能の發達は骨格の發達と平行して居ると知れたならば、精出して骨格を發育させれば、智能も自然に發達するから、忽ちに教育の効果が見えるのである。ところが斯う言つた關係は今までの處では全く知れて居らない。知れて居なければどうするかと言ふに、どうも已むを得ない。心身別々に各部の各時代の發育標準と言ふものを能く調べて、成るべく其の標準に近づくやうに、體育にも心育にも力を用ひる外は無。そこで、最も大切なのは各時代に於ける精神と身體との發育標準である。以下少しくこれを掲げよう。

### 第二節 身體の發達

まづ、生後より六歳までの身體發育表を掲げる。これは三島博士の調査で、少々古い。表中數字は、キログラムセンチメートル 疋、センチメートル 厘を示す。

年齢	體 重		身 長		頭 圍		胸 圍	
	男	女	男	女	男	女	男	女
初生兒	三、〇四	二、八七	四九、一	四八、七	三三、八	三三、三	三二、四	三二、三
一ヶ月	四、〇七	三、八〇	五六、五	五五、五	三六、九	三六、五	三六、三	三六、〇
一ヶ年	九、〇〇	八、五〇	七三、五	七二、九	四四、四	四四、一	四五、七	四五、四
二ヶ年	一〇、八〇	九、九〇	七九、五	七八、九	四六、七	四五、八	四六、八	四六、二
三ヶ年	一二、四〇	一一、五〇	八五、四	八四、九	四七、六	四六、九	四八、一	四七、二
四ヶ年	一三、七〇	一二、九〇	九一、七	九一、〇	四八、九	四七、八	四九、五	四八、六
五ヶ年	一五、二〇	一四、五〇	九七、四	九六、三	四九、三	四八、七	五〇、五	四九、八
六ヶ年	一六、五〇	一六、〇〇	一〇二、八	一〇二、四	五〇、二	四九、七	五二、七	五一、九

大正十年内務省主催兒童衛生博覽會に出品された統計は三島博士のと多少の相異がある。表中數字は貫尺を示す。



年齢	體重		身長		頭圍		胸圍	
	男	女	男	女	男	女	男	女
一ヶ年	二、二七三	二、二〇五	二、三六三	二、三四三	一、四九八	一、四六七	一、四八七	一、四四九
二ヶ年	二、四八四	二、三三四	二、五一七	二、四五六	一、五一八	一、四六九	一、五〇六	一、四七二
三ヶ年	三、一三三	二、九二七	二、八二二	二、七六〇	一、五七三	一、五三三	一、六一七	一、五六八
四ヶ年	三、六五	三、三六五	三、〇五〇	二、九五〇	一、六〇〇	一、五五一	一、六九三	一、六一四
五ヶ年	四、〇四九	三、七九六	三、二四〇	三、一八二	一、六一二	一、五七七	一、七三〇	一、六五九
六ヶ年	四、二九五	四、一七一	三、三七三	三、三八〇	一、六二四	一、五八八	一、七五三	一、七一四

次に七歳より十二歳までの児童について、文部省が全国に互つて十八ヶ年間の報告を統計したものを擧げると次の通りである。

年齢	體重		身長		胸圍	
	男	女	男	女	男	女
七歳	四、六六八	四、五〇〇	三、五三	三、四八	一、七九	一、七九
八歳	五、一三二	四、九一九	三、六七	三、六三	一、八五	一、七九

九歳	五、六〇七	五、三八七	三、八二	三、七八	一、九一	一、八四
十歳	六、一三三	五、九〇〇	三、九八	三、九三	一、九八	一、九〇
十一歳	六、六五九	六、四八九	四、一二	四、〇七	一、九六	二、〇九
十二歳	七、二六一	七、二三六	四、二五	四、一五	二、〇九	二、〇三

右の標準によつて見ると小學校入學の時期に達した児童は男は體重四貫六百六十八匁身長三尺五寸三分、女は體重四貫五百匁身長三尺四寸八分たることが必要である。ところがこれは平均數であるから、事實になると、六歳で早くも此の標準に達するものもあれば、八歳になつても未だ此の標準に達しないものもある。精神機能に就いて言つても同斷のことがある。畢竟小學校の入學始期を満六歳と定めるなどは杓子定規と言へば言へるのであるが、法令の規定はいつも此の種の弊害は免れないものである。

尙其の他の部分について發育の標準を擧げて見よう。

大願門閉鎖期 十三ヶ月。二十五ヶ月までは病態では無い。段々大きくなれば病態である。



歩行期 生後十三ヶ月。少々前後するのは差支無いが、數ヶ月も後れるのは悪い。

齒 乳齒は 齶齶(併發)の方程式で生えて行く。永久齒は第五乃至七年より第十三乃至十六年までに生える。智慧齒は殆んど一定して居らない。

呼吸

生後	四四前後
五年	二六前後
十年	二三前後
十五年	二〇前後
大人	一六一一八

脈搏

生後	七二一九四
幼兒	八四一一〇
兒童	七五—八四

大人 六五—七〇

方程式 脈搏=呼吸×4

體溫

初生兒	三七、八一三八
幼兒	三七—三七、五
兒童	三七
大人	三六、五—三七

體溫一度を増す毎に脈搏は八回を増す割合

睡眠

初生兒	二三時間 哺乳時以外は醒る
一ヶ月	一六—二〇 晝睡を要す
二—三年	一三—一五
四—五年	一一—一二時間

第十七章 兒童の發育標準



七一九年  
一〇一二年  
一二一三年  
一四年  
大人

一時間  
一〇一時間  
一〇時間  
九時間半  
七、八時間、四、五時間にて足りるものもある。

### 第三節 精神の發達

精神の各機能について其の發育の標準は、未だ充分に確定されて居らない。獨り智能の標準のみが、稍々信頼に足る程度に研究されて居るから、左にこれを掲げる。

#### 一九二一年式ビネー・シモン法

##### 三歳の兒童

- 1 名稱を言つて其の物を指示させる。

- 2 繪の敘述。

- 3 二個の數字の反復。

- 4 六聲音の語句反復。

- 5 氏名を言はせる。

##### 四歳の兒童

- 1 男女の性別を言はせる。

- 2 事物の名を言はせる。

- 3 三箇の數字の反復。

- 4 二個の直線の長さを比較させる。

##### 五歳の兒童

- 1 二個の重さの比較 三匁と十二匁。六匁と十五匁。外形及大きさは同一なるを要する。

- 2 簡単な方形を模寫させる。

- 3 十聲音の語句反復。



家庭教育

111111

- 4 智慧の板並べ、二箇の三角形カードをつまめて三角形とすること。▽△△△
- 5 数へ方一錢貨四個を示して、いくつか。

六歳の児童

- 1 朝と晩との區別。
- 2 有りふれた事物の用途。
- 3 三角形及菱形を畫かく。
- 4 一錢貨十三個を一行に並べて數へ方。
- 5 美醜の判斷。

七歳の児童

- 1 左右の別。
- 2 三個の命令を同時に與へて遂行させる。
- 3 貨幣の價格の識別。
- 4 繪畫の説明。

- 5 四種の色を識別。

八歳の児童

- 1 二個のものを記憶によりて比較し差點を言ふ。
- 2 逆に數へ方、二十より零まで。
- 3 未成の畫について其の缺けたのを補ふ。
- 4 完全に年月日をいふ。
- 5 五個の數字の反復。

九歳の児童

- 1 釣銭の計算。
- 2 事物について用途以上の説明。
- 3 貨幣の種類名稱。
- 4 一ヶ年の月名。
- 5 次の如き簡単な問に答へる。

第十七章 兒童の發育標準

11111



家庭教育

列車に乗り後れたらどうするか。

十歳の児童

- 1 五個の重量を重さの順序に列べる。
- 2 圖形の記憶模寫。
- 3 不合理な文章の批評。
- 4 次の如き問に答へる。  
學校に遅刻するだらうと思つた時はどうするか、其他四問。
- 5 三語を用ひて最簡の文章を綴らせる。

十二歳の児童

- 1 線の比較の際、暗示に抵抗する。
- 2 三語を與へて文章を作らせる。
- 3 三分間に六十以上の語をいふ。
- 4 三個の抽象名詞を定義する。

十五歳の児童

- 1 七個の数字の反復。
- 2 三個の韻の發見。
- 3 二十六綴音の文章の模倣反復。
- 4 繪畫の説明。
- 5 疑問體の文を読み聞かせて答へさせる。

大人の検査

- 1 襪んだま、の切抜の形を想像して畫かせる。
- 2 名刺形の原紙を一対角線BCに沿つて二分し、下方の三角形ABCを裏返す時にどんな形になるかを畫かせる。
- 3 帝王と大統領との主な相異點三つを言はせる。
- 4 類似の抽象名詞を區別させる。

第十七章 児童の發育標準



5 思想を要約させる。

以上は佛國のビネー・シモンの検査法であるが、この法が一度發表されるや、各國の學者が自國に適用して見た。そして言葉風俗等の相異に因つて皆多少の修正を試みた。ドイツではポベルタツハが改訂を加へ、米國ではターマン、チャイルド及びガダードなどが改訂を加へ、日本では三宅氏久保氏三田谷氏などが改訂を加へて居る。

言語發達

人は二本足で歩む動物だとか、手で仕事をする動物だとか、笑ふ動物だとか言ふが、結局靈智のすぐれた動物で、言葉を使ふものだと言ふのが確かな定義である。そこで言語の發達は兒童の精神の發達を鑑別することが出来る。

嬰兒前期 最初の六ヶ月 感動的時代 Emotional stage 啼いたり叫んだりするだけ。

嬰兒後期 次の六ヶ月 唇音時代 Babbling stage ウマウマ、バアバアといふ、音を發するが語を言ふことは出来ない。

生後二年 模語時代 Chattering stage 親や周圍の人達の語るのを物珍しげに聞いて喜んでそして盛に眞似る。

すべての發音はまだなし得ない。むづかしい音はやさしい音で代用する。この期の半になれば單語で意志を表現しようとする。かつかといへば菓子欲しい、下さいと言ふことである。もうもといへば牛が居る、見たいと言ふことである。學者はこれを單語文 word-sentence と名づけてゐる。この期の終りから三年にかけて主語と敘述語、主語と目的語などを含んだ簡單な談話が出来るとなる。

生後三年 談話時代 Talking stage これから談話が出来るのである。音は大概は發し得られるが、らりるれるなどは、尙二三年の間完全には發音し得られないのである。

爾後次第に發音も明瞭になり、語數も増加する。語數の増加するばかりで無く、各語の内容も充實して來るのであるが、成長の各年に相當した使用語と使用文とはどんなものかといふ標準は未だに研究されてない。



第四節 治療よりは診察

彼れは藪醫だ、是れは名醫だと言つても、盛る薬や施す手當にさほど相違があるのでは無い。名醫の名醫たるところは、實に其の診察にあるのだ、見立てにあるのだ。治療よりは診察とはこれを言ふのである。

併し、如何なる名醫と雖も、十分間や二十分間の診察で十分に解る筈が無い。されば大事をとる名醫になると、まづ日頃の健康の状態を調べ、かつて罹つた所の病氣については、事細かに當時の状況を尋ね、其の上小水と便とを載きたいと言つた上に、先づ二三日様子を見ませうと言つて、さつさと歸つて了ふ。風邪だとも胃腸病だとも診断を下さないで往つて了ふ。そこが名醫の名醫たる所で、一度や二度の診察では何とも判定しかねるのである。主治醫即ち所謂かゝりつけの醫者の大切なのは此處にある。

併し、尙考へて見るに、かゝりつけの醫者と雖も偶に診るのである。若し朝から晩まで見て居

る人があつたならば、其の診断は頗る確實のものと云はねばならぬ。そんな人があるか、ある。母親は即ち其の人では無いか。母親は實にかゝりつけの醫者であるのである。母親の多くは幾人かの子供を育て上げて居る。又朝から晩まで其の子供の様子を知つて居る。只母親の缺點とする所は診断の知識の無いことだ。母親にして若し少々醫學の知識があつたなら、それこそ鬼に金棒といふべきである。私は母親の醫學の知識を學得することを切にお勧めする。

さて診断に必要なのは發育標準である。これが尺度である。此の尺度なしに、自分の子供が發育が善いか悪いか、健か弱か賢か愚かを知ることは不可能である。併し、標準は平均數を示したものである。實際にこのまゝのものは世間には一人も無いのである。實際の人々は此の平均價の左右を彷徨つて居るのである。例へば婦人の標準身長が四尺九寸といふのは、四尺九寸前後といふことであるに過ぎない。して見れば標準に合せて見たと云ふだけでは直ちに安心も出来なければ、心配する必要も無い。そこで最も大切なのは月に一回とか年に二回とか時日を定めて心身検査を行ふことである。さすれば發育標準との比較も出来るし、前後の發育の工合もよく知れる。



こゝに至つて検査が始めて效力を呈して来て、健否を豫報することが出来るのである。どうか時々検査をする、時々診断をするといふ習慣をつけて欲しい。

家庭教育終

家庭教育の實際



# 家庭教育の實際

東京女子高等師範學校教授  
文學博士

下田次郎

## 緒論 教育上より見たる家庭

人は生れながらに有する心身の素質と、環境の影響との所産である。而して環境はこれを分つて、家庭、社會及び自然とすることが出来る。この三者は各々教育上特殊の力を有するものであつて、この力を十分良く働かす事に由つて、教育の美果は收められるのである。

緒論 教育上より見たる家庭



人は家庭で生まれ、家庭で教養せられ、家庭で生活し、而して家庭で終はる。これが最も正常な人間の一生である。それ故、人の教育上及び生活上家庭に負ふ所は至大である。家庭は子供が小學校に行く前からあり、學校教育を終つてからもあり、終始生活の環境として離れることがない。即ち家庭は教育の中心であり、策源地であつて、社會や自然の教育的影響も、家庭を基として受けて居るのである。従つて、子供の教育は、家庭の教育から始まるのみならず、またそれが教育の根本でもあるから、良く子供を教育せんとする者は、最も重きを家庭の教育において、最善の注意と努力とがこれに拂はねばならぬのである。

かういふ意味に於て、自分は多くの子供の親として、實際行つて居る事や、感想や希望を取合せて、家庭教育に就て述べて見たいと思ふ。

教育の働きは、通例體育、知育、徳育の三つに分けるから、この分類によつて説いて行かう。

## 第一章 家庭に於ける體育

教育の先決問題は、兒童の心身の素質である。教育はその素質の上に加へられる影響であるから、如何に影響が良好でも、素質が悪ければ、その効果は少く又は無いこともある。素質と影響と共に良好であれば、所謂鬼に金棒で、これに越したことはない。心身の素質は遺傳に由り、又妊娠中の母體の状況に由るものである。これは配偶の選擇即ち結婚問題と、胎教の關與する所であつて、教育の先決要件として、非常に大切な事であるが、それは他で説かれて居るから、こゝには述べない。

父母が強健であれば、生れた子もまた強健である。その上母の乳が良くて十分に出来れば、子は丈夫に育つ。「生き身には餌食あり、乳房といふ天道のお扶持方」(近松)。獸類は母の乳でのみ育てられる。人々は人工榮養もあるが、母の乳で育てるのが、最も自然的で且つ多いのである。乳の出ぬ原因には種々ある。一つは母の體質にも由る。親が酒飲みだと、その娘に授乳不能者がよく



あると、瑞西のブンゲ教授は云つて居る。即ち親は勿論、祖父母の酒飲みも、哺乳上不利益であるらしい。加之、飲酒家には、變質や低能の子が出来る見込みが多い。それで親が酒を飲みながら、良い子を生まうとか、家庭教育を能くやらうとか考へるのは、最初から矛盾で、出来ぬ相談である。

人は動物であるから、動くのは本來の約束である。それで乳兒でも、寢床に仰臥しながら、盛に手足を動かす。それから、獨りで向きかへつて、うつ伏せになり、這ひ、いざり、立ち、一年もすると、始めて歩くやうになる。嬰兒の運動は、心身の發育上必要なことで、よく動く兒は、身體が強く、勢力の盛な印である。又泣くのも、運動になる。力強く泣くのは、丈夫な證據で、胸廓を發達せしめる。餘り動きもせず、泣き聲も弱いやうな子は、身體薄弱の方である。しかし、いかに生れが弱くても、親の注意如何では育つものであるから、親は決して歎息せず、小兒科の醫師とも相談して、折角養育に力を入れるがよい。我が國內地に於ては、大正九年の出生總數は、二、〇二五、五六四人であつて、一歳未満の小兒死亡數三三五、六一三人である。即ち出生兒中六人

に一人強は一年以内に死亡するので、これは親の養育上の不用意にも由るのである。弱く生れても、親の養育その宜しきを得れば育つものである。佛國のビクトル・ユーゴーは生れた時は如何にも弱く、半ば死にかけて居たが、母親の丹精で命を取りとめ、遂に八十三歳の長命を保ち、世界の文豪として不朽の人となつた。

小兒が歩行し得るに至れば、運動がついて、身體の發育は一層有利となる。人は直立して二本足で歩行する唯一の動物である。人の祖先は猿のやうに、樹上の生活をしたものであるが、それが或時期に於て、木から降りて、地上を二本足で歩くやうになつた。即ち二本足の歩行は、人間特有のもので、所謂徒歩は最も自然的理想的の運動法である。これは小兒のみならず、大人でも老人でもさうである。それで小兒が歩き出したことは、人の一特長が發揮され出したことである。

人が二本足で直立した結果、前肢二本は肩から宙にぶら下る。文化なるものは、この浮いて來た兩手で、やつた仕事である。小兒は歩行すると共に、浮いた兩手を盛んに動かして、外界の行



形物に當つて見て、その性質を知り、又これを支配せんとする。

それで幼児の教育は、先づ筋肉の活動から始まると言つてよい。人の身體は、下等の動物から進化して出来たものである。従つて身體の各部には、その成立の由来がある。筋肉でも由来の古いものと新しいものがある。胴があつて、手足のない動物はあるが、手足があつて胴のない動物は無い。例へば蚯蚓の如き蠕形動物は、胴はあるが手足はない。魚類となると、鰭があつて四肢の始まりであり、蛙の如きは立派に四肢を有し、獸類も四ツ足といはれる程である。それで人にあつても、胴の筋肉は由来が舊く、四肢の筋肉は、胴の筋肉の上に、後から加はつたもので由来が新しい。前者はこれを基本筋といひ、後者はこれを附加筋といふ。基本筋は胴、肩、股等の筋肉がそれで、身體の幹部に位し、太くて強いが、運動は荒くて大ざつぱである。附加筋は身體の周邊部に位し、細くて弱いが、その代り運動が細かい。基本筋の練習は、筋を動かしたり、歩いたり、腕を動かしたりして居る中に、自然に出来るもので、別に教育する必要はない。土方、車夫、人足の如きは、この基本筋を資本として生活するもので、別に教育を受けないでも出来る。

仕事である。これに反して、技能なるものは、手指や、喉の附加筋等を練習して獲られるものであつて、教育に由るの外はない。つまり無教育の者は、主に基本筋で稼いで生活し、教育ある者は附加筋で生活して居るのである。

しかし發生學的にいへば、基本筋は根幹で、附加筋は枝葉である。根幹を養はねば、枝葉は榮えない。従つて筋肉の練習は、先づ基本筋から始めて、附加筋に及ばねばならぬ。即ち小さい時は、歩行を始め、走つたり、飛んだり、角力を取つたり、ボールを投げたりするやうな基本筋を、主に使用せしめるが好い。もしその反對に懸坐せしめて、指の細かい使用などをさすと、土臺の固まらない上に、家屋を建てるやうなもので、顛倒する恐れがある。小さいのに手細工が上手であるが、運動は嫌ひといふやうな兒は、早熟な兒として、褒められることがあるが、こんなのは却つて發育が早く止まつたり、若死することがある。それ故、小さい時は基本筋を主に使つて、運動をさすがい。幼稚園に於ても同様である。この點に於て、男の兒も女の兒も區別は無用であつて、尋常小學時代までは、女の兒も男の兒と同様飛んだり跳ねたりするがよいのである。



家庭に於ても、室内で子供が角力、取組み、跳躍をしても差支ないやうにしておきたい。即ち壁には腰板を打ち、柱などの角を圓くし、畳も痛んでもよいこととしておく。室内を綺麗にしておくこと、畳の痛まぬことを主とすれば、それだけ子供の活動が禁止されて、不自然におとなしい者になり、身體の發育が遂げられない。又庭があれば、これを子供の運動場にした。日本の庭は、中央に樹を植ゑ、石を置き、石燈籠を据ゑ、苔を生やしたりして、座敷に坐つて大人の觀るもの出來て居るが、子供のある内では、中央の地面はあけて、子供の遊び場として、或は砂場や、土俵を作り、周圍は走れるやうにしておくがよい。三四十坪の庭があれば、疾走、三輪車の乗廻はしもでき、小規模のテニスコートにもなり、リレー・レースも出來、砲彈擲けの眞似も出來る。親も庭の石や樹を見て居るよりも、子供が嬉々として遊び、運動して居るのを見て居る方が、どの位氣が晴れるか知れない。時には親も子供に交つてやると、なほはづんで喜ぶ。これは親の若返り法としても有效である。もし庭の外に空地があれば、そこを運動場として、テニスコートも設けるがよい。芝草の平地などは特に結構である。

それで庭に樹を植ゑれば、垣に沿ふて、外圍に植ゑることにしたい。人は人となる以前樹上の生活をした者であるから、子供は木登りが好きである。木登りは筋肉を發達せしめ、動作を敏捷にし、高所に在つて泰然自若たらしめる。又枝に留つて、木の葉の中に埋れて居るといふことが精神を新鮮にし、氣を鎮めるに有效である。それで庭には子供の登るやうな樹が欲しいものである。それには公孫樹が一番好いやうである。公孫樹は蟲がたからず、下から枝が横に段々に出て居るから、小さい兒にも容易に登れ、登つてからの留まりが好い。幸に自分の庭には、姿の好い可なり大きな公孫樹があるが、これが日常どの位子供に利用されて居るか分らない。兎に角子供に木登りは合ひ性である。公孫樹と青桐とは防火にも有效であるといふ。

一體草木は人類が地上に出る前からあつたもので、禽獸のホームであり、人類でも家屋を造る前には、草木はやはり自然のホームであつた。草木は人の出現を待ち受けて居た最初からの環境である。植物は人類の先天的養護者である。それで幼時から植物に親しむといふことは、人の建造物に接することよりも、身體の發育上、遙に有利である。即ち子供は、樹木の多い、野には草



花が美しく咲き、蟲には作物が出来て居る地方に在つて、育つ方が、家屋と道路と人間と車ばかりの都會で育つよりも好いのである。

土に親しむことは人を健康ならしむるものである。跣足で地を踏むのは、謂はゞ「母なる地球」に、足の裏の胎盤でびたりとくつつくことで、甚だ感じのいゝものである。それで子供もなるべく跣足で地を踏むことをさせたい。これは蟲を作つたり、園藝をしたりしても出来る。子供に一坪でも土地を興へて、花卉を栽培せしむることは望ましい。朝露のおける草路を歩くとか、海岸の砂濱を歩くなども、至つて健康によい。この點に於ても都會の子供は可哀さうである。

土と共に水も、人類には缺くべからざるもので、子供は水遊びが好きである。夏などには鹽に水を入れて遊ばし、水蹴籠をやらし、水撒きをさし、又は河や海に連れて行つて、水に親しみますのは、子供の喜ぶものである。砂いぢりも子供の好きなもので、砂場は幼稚園のみならず、家庭にも設けたい。子供は砂と水があれば、實によく遊ぶもので、教育的にも種々利用できるものである。特に砂は自然の風景や人造物の縮圖を、形體的に表はすに都合がよい。盲人教育にも砂場

は大に役立つものである。

子供の着物は成るべく自由で、運動に便利なものにしたがう。筒袖は勿論だが、和服は足にからまるから、今後はなるべく洋服にしたい。小兒は膝から下は露出して居てもよい。女の兒も洋服にする。小學校時代は勿論、嫁入りまでは、少くも外出は洋服ですますと、身體のこなしが自由で、運動が敏活であるのみならず、経済からいつても、非常に利益である。過般の大震災の時に、婦人は着物が手にまとひつき、足にからみつき、おまけに袖が邪魔になつて、どの位活動を妨げ、逃げ足をおそくし、死傷を多くしたか分らないと思ふ。日常の生活に於ても、婦人は丁度この和服程度の鈍い働きしかして居ないのである。それで體育上は勿論、生活上からいつても婦人も洋服を着ることにし、先づ女の兒から實行したいものである。

子供の居室は南向きの日當りのよい所にするなどいふことは、普通言はれて居ることだから、こゝに改めて説くまでもあるまい。



## 第二章 家庭に於ける知育

家庭は徳育の場所であつて、知育は主に學校に於て行ふべきものと、通例思はれて居て、家庭は案外知育に就ては無關心のやうに見える。しかし子供は生れてから、小學就學前の六年間に非常によく多くの事を學習するもので、後年のどの六年間に於ても、この時期ほど多く覺へることはできないといふ人もある。そしてそれは感覺器官や手足の使用に由つて、人手を借らずに、獨創的に學習し、自分で思考工夫することが多いので、子供は皆或度まで天才といつてよい。獨逸の詩人ゲーテは、子供が子供の時のやうに發達を續けたならば、各の人は皆天才となるであらうといひ、同じく哲學者ショーペンハウエルは、各の子供は或度までは天才である。天才は或度までは子供であるといつた。兒童心理學の粗ともいふべき、獨逸のチーデマンは、兒童の精神は未だ教師を有せざる年頃が、恐らく最も多く、且つ最も速に學習するといつて居る。

それで小學就學以前に、家庭に於ては、知育にも大に考を廻らして、子供の精神的收穫を良好

ならしめることを努めねばならぬ。しかしそれは親からの注入に由つて、他力的に何でも彼でも詰め込むといふ意味ではない。子供の五官に訴へて、觀察の材料と機會とを與へて、親はこれを輔導すればよいのである。子供は何でも自分でやつて見たがるものであるから、なるべく親は子供のやつて居る途中で引取つたり、干渉したりせぬやうにする。それで小さい時から、自然物や人工の物を提供して、これを五官に訴へて、試めさすがい。視覚は經驗的知識を、最も多く與へるものであるが、唯物を見せるばかりではいけない。觸覚、味覺、嗅覺、聽覺、筋肉覺に訴へて、その各から得る經驗を總合せしめて、始めてその物の完全な知識が得られるのである。就中、筋肉感覺は、具體的に實物感を得しめるに最も有效である。その他の感覺は、謂はゞ蒸發的であるが、筋肉感覺は印象を強く長く留めるものである。それで有形物は成るべく子供に扱はせて、筋肉感覺を得しめることを忘れてはならぬ。例へば林檎を味はすにしても、始めから剥いて食べさせずに、その色、光澤、匂ひを知らしめ、且つこれを手に持たして、その堅さ、大きさ、重さを經驗せしむるがよい。又食べる時には、顎の筋肉の力の入り具合を経験する。橙の如きは投げさし



て、その腕の力の入り加減を知らずもよい。又生き物ならば、それを取扱ふ時に、向ふから来る反動を経験することは、その物をよく知るに必要である。即ち、鳥や猫や犬の如きは、唯見たり、食物を與へただけではいかない、これらに接觸して、如何なる手答へがあるかを知るを要する。眞に馬を知るには、見ただけでなく、その手綱を取り、又は乗つて見て、如何に馬が反動するかを試めずを要する如きものである。これを筋肉活動主義の教育といつて居る。教育は筋肉活動に訴へる教育、即ち活きた教育でなくてはならぬのである。

それで家庭に於ても、子供に唯物を見せておくだけでなく、成るべく手に觸れ、振り、投げなどして、様々に筋肉のテストにかけさすがいよい。時々裂いたり、破つたりすることすらも必要である。始めは基本筋を使用するのであるから、大まかに取扱ふ物を提供する。漸次手指等の練習が積んでから、やゝ精巧な物を渡す。玩具でも、唯見るばかりのものは、子供は餘り有りがたがらず、又ぢきに厭きてしまふ。それで玩具は成るべく動くものが好い。子供が力を加へた結果、動き出すと面白がる。自分の力が、玩具の動く原因の一要素となれることが分るからである。

色

コマ、手毬、羽根つき、ゼンマイ仕掛けの玩具の如き、これでその他澤山ある。且つその動かし方に巧拙のあるものは、練習するに従つて上達を見る喜びもある。

筋肉を使用することは、實物の實物たる根本的性質を知らしむるのみならず、知能の發達を促し、又身體の發育にも有效である。その他の感覺に就ても、成るべく十分の材料を與ふるを要する。色の知識は、色紙、色のある自然物、物品、繪畫の等によつて、これを得しめ、色を區別することを始め、漸次その名稱をも授ける。普通の人が、色の區別や名稱について、案外貧弱な知識をもつて居るのは、少時その教授上の用意を缺いた爲である。耳は幼時は甚だ敏感なもので、微妙な國語の發音や訛をも、いつの間にか聞き覺える。それで聽覺の練習は特に幼時に正しく行はねばならぬ。家庭の人々の發音が正しく、美音で上品であれば、子供もそれに化せられる。又良い蓄音器と、良いレコードを備へて、時々これを聽かすことは願はしいことである。これにも年齢に合ふやうに、子守歌、童謡、その他の曲を選ばねばならぬ。今日ばかりの研究も進み、樂器店などには、その案内書もあるから、よくレコードを選択するがよい。小さい時から良い音樂

聴



で耳を慣らしておく、殆んど先天的に音の聴き分けができ、音楽の鑑賞も出来る。今日蓄音器は唯娯楽だけのものでなく、教育上にも必需品といつても可い程である。その上家庭の人々に音楽趣味があつて、聲樂や器樂をやり、又子供にも相當のものをやらせば、尙結構である。今日我が國家庭の一つの缺陷は、家庭の人々に音樂的教養の足りない事で、文化の國民としては、物足りないことである。

直観は感覺器官によつて、外物を認識すること、知識の原料は直観から得られる。即ち直観で、先づ確實に外物の性質を知り、然る後これに相當する言語を授くるのが順序である。それで幼時から、自然物を正確に觀察せしむる機会を與へ、又その習慣を養ふ必要がある。從來家庭でその用意を缺いで居た爲に、自然物に對して、空漠たる又は間違つた心像を有する者が多い。例へば朝顔や桔梗の花の形は知つて居ても、朝顔の蔓の捲き方、桔梗の葉の附き方となると、正確には知らない。挿花を練習する婦人は多くあつても、植物そのものの觀察はお留守である。蜘蛛の巣はよく見るが、それを造るとき、縦横の糸を如何なる順序で張るか知つた人は少ない。暇が

ないのでない、注意する習慣が養はれて居ないからである。佛蘭西の詩人的科達者フアール・の昆蟲の研究の如き、我々に面白い別世界を紹介せるものであるが、それも一は根氣よき觀察の賜物である。綱線の吊橋は蜘蛛の巣から考へ出し、水電の鐵管の織ぎ合せは、蝦の殻から思ひついたといふ。それで自然物を正確に觀察すると共に、これに就て考へるやうにしたい。自然は實に精巧に出來て居るから、よく注意すれば、種々有益なる暗示を與へるものである。

家庭に於ては、子供にも園藝をやらして、植物の觀察をせしめたい。趣味の養成にもなり、健康にもよい。庭の立ち樹だけでも、觀察の材料はいくらもある。動物の飼養にも同様の意義がある。特に子供は動物を愛するから、鳥や小動物を飼ふとよい。しかし後には食物を忘れて餓死せしむることがあるから、その注意を怠つてはならぬ。

地方の子供は、自然を觀察する機会が多い。蟲の作物、果樹などは、豊富な觀察の材料を與へるのみならず、これを耕作することが、勤勞の習慣を養ひ、物の價値を教へる。都會の子供は、米穀でも果物野菜でも、出來た物を店頭で見ただけで、その成熟に至るまでの手續を知らな



いから、自然そのものゝ有がた味が分らず、物を粗末にする傾がある。それで、時々子供を郊外に連れて行つて、島の物の出来て居る有様、農夫の勤勞の様子を見せるがよい。米の稔つて居るところ、豆のなつて居るところを見るのと、米屋に唯粒として盛つてあるのを見るのとは、餘程意味が違ふ。夏など地方に行つて居れば、南瓜、水瓜が、島に轉がつて居るところ、小豆のなつて居るのなど、見るだけでも爲になる。秋の芋掘りなど、子供の大に喜ぶもので、栗拾ひも面白く、柿柿の見上げも楽しい。牛や馬や豚を、野に、小舎に見るのも、よい見物である。河や海や山に就ても同様である。又動物園、植物園、水族館なども、あれは利用すべきは云ふまでもない。かゝる觀察をすると共に、親はそれに就いて説明し、子供の所見を言はしめ、又は作文さして見るとよい。

製作物の觀察に就ても、大體以上の精神に於てする。先づ日用の手近の物から始めて、漸次、様々の物を見せる。製作物も唯出来上つた物を観るのみならず、製作の手續を観ると、その物の有りがた味が分り、勞働の價値を知り、物を粗末にすることが出来なくなる。それで唯店頭に陳

列してある物を観るだけでなく、製作所、工場などを參觀さすがいのである。氷のやうな物でも、製氷所に往つて見ると面白い。又物産陳列所、博物館なども、あれば時々見せる。

電車や汽車に乗るのは、小兒の甚だ喜ぶもので、又大人の氣の付かぬ細かい所まで、よく觀察するものである。小舟に乗るのも面白いが、汽船や軍艦を見せるのは得る所が多い。客船なら船室に連れて行つて、こゝで幾日寝ると、アメリカに行けるとか話してやると、廣い氣持を養ふことができる。その他ブリツヂ、機關部、無線電信など、見るもの、聞くものとして、珍らしく、面白からぬはない。或は荷船が鳥糞の土を下ろして居るのを見て、南洋の話をするとか、一日港の見學は非常に有益である。

かゝる見學は、親には珍らしくならず、又休日には内で休んで居る方が好いこともあるが、子の爲に出かけるのである。夏に海濱や山に行くのも、同様である。贅澤でない限り、毎年夏には地方に子供を連れて出かけたがよい。随分親は心配で、骨が折れるが、やるだけの教は十分ある。最も行くについては、その地方に然るべき醫師のありなしを知り、又一通りの藥、氷嚢などを持参する



がよい。

實物の觀察と相俟つて、圖畫を示すことも、知育上缺く可からざることである。寫眞や繪はがきなども、廣く各方面の知識を興へる。内外國の風景、産物、風俗等はこれで大體が分る。又室内にはボール紙などで作つた繪はがき挿みを掛け、四季に應じ、又はその人事に関する繪のはがきを示す。子供自身に選ばして、時々代へるのもよい。圖畫をピンで留める木製の版も、利用の道が多い。こゝには年齢によつて、お伽譚の美しい繪や、雑誌の繪などを出し、又子供の圖畫、習字、作文など、學校の成績品で良かったものを、張り出してやる。先生に認めてもらつたことを、親にも知つて貰ふのは、子供の大なる喜びである。子供は二重丸や甲が附いたものなどは、親の歸るのを待ちかねて、玄關に足音がすると、上らぬ内に、今日はこれであつたと見せる。その時親は見ても共に喜んでやり、なほ、もう少しこゝがかうなつた方がよいとか注意してやれば、勇んで尙ほ勉強するやうになる。

子供が學校に行くやうになつても、知育は學校任せでよいものではない。常に學校との連絡を取り、子供の修學狀況を知るは勿論、教科書の内容も知つて、この頃はどの邊を習つて居るかを心得て、時々これに關する話をして、その知識を補足する。子供に學校で習つた話をさせば、大抵は何を習つて居るかは分るから、話す習慣をつけておくがよい。これは話の練習にもなる。

子供用の書物も、學力に應じて備え付けておきたい。これは教師に聞き、又は親がすべて購入する。親は子供の爲に時々本屋に入つて、子供の読み本を求めて來る。子供は随分時間があり、又早く読む者であるから、小學校卒業までには、可なり多數の書物を讀了する。お伽譚、物語、英雄傳、理科書等、一通りのものは讀んでしまふ。天文の如きも、星座表と天文の本を興へておけば、一人では是を見て、その名や、性質を知るやうになる。無闇に書物を興へるのもいかないが、健全な良い書物を學力の程度で興へれば、小學校を出るまでに、可なり多くの知識は得られるのである。子供にも時間の利用と浪費はあるから、成るべく利用の道を講すべきである。それには親が讀書家であることは、一層都合である。親が本嫌ひだと、子供もさうなつて、よくない遊びに、耽るやうなことになる。母は常に子供に接して、教へる機会が多いから、母が子供の関



に答へ得るほどの知識があると、學習上甚だ有利である。これに就て、或母親は、次のやうに言つて居る。

子供が往來で砂利石を拾つて來て、「母様この石の縞のやうなものはなあに？」と問はれても答へられない。又子供を連れて町に出て、「この花はなあに？」「自動車はどうして動いて居るの？」「雨が降つて來れば、「雨はどこから降るの？なぜ冷いの？」、「これは何、あれは何、なぜだ、どうしてと、根ほり葉ほり、日々子供が無數に發するこれらの間に對して、明かに、適切に、誤りなく答へ得るおつかさんが、どれだけあるだらうか。あゝこゝまでは話してやる事ができたが、この先を聞かれたらどうしよう。實に薄水を踏む心地のした事が幾度あつたであらう。これらの事は、今一段高い知識見解を備へたおつかさんでなくては、解決はつかないと思ふ。庭の小石や樹々や、臺所の野菜や魚が、「それで一等國の小國民を教へ得るか。あまりに大膽ではないか」と笑ひさうである。誠に心細い次第である。

これは我が國の高等教育を受けた婦人であるが、それでさへ此の嘆聲である。世間普通の母

に、この嘆聲の聞かれぬのは、この嘆聲を發するまでの自覺も起らず、始めから投げて居るから、一向平氣なのではないか。さりとて困つたものである。母親も小學校は勿論、中等學校時代の子供の不審を、解いてやれるやうになりたいものであるが、今はまだ望めないのは残念なことである。女子教育はまだまだ向上せねばならぬ。

雜誌についても、大體書物と同様の注意を要する。我が國には、外國に例のないほど雜誌が多く、従つて低級なものも少くないから、手當り次第に讀まさず、よく選擇して與へねばならぬ。幼年雜誌など何種もあり、且つ教育的でないものもあるから、特によく選ばねばならぬ。新聞は成るべくおそく讀むやうにするがよく、また讀むところを限るやうにしたい。日頃から親の命を守る子は、讀むなといへば、讀まぬものである。

前に筋肉の練習の事を述べたが、手工や理科の實驗も學校に限るものではない。事情の許す限りは、家庭にも二坪位でもよいから、手工と理科の實驗を兼ねた作業室を設け、そこに一通りの道具、機械、材料を具へて、子供に内でもやらすがよい。これらは子供の甚だ喜ぶもので、その



効果は多大である。よく子供は學校で習つて来て、縁側などで、手工道具や薬品を使つてやるもので、縁側が傷だらけになり、薬品のしみがついたりするものであるが、それを恐れて、爲さしめぬのはよくない。それでこの作業室があると、洵に結構である。随分その出来る家庭で、他の事には寧ろ不用と思はれる費用をかけながら、子供の作業室を設けないのは、どうしたことか。

### 第三章 家庭に於ける徳育

家庭は徳育を行ふ最も大切な場所とせられて居る。幼時の感化は最も強く且つ永続的である。それ故親が道徳的品性の立派な人であれば、子は自らそれに化せられて、やはり立派な人となり易い。徳育は特に人格の問題である。各家庭にはそれ／＼道徳的空氣があるもので、その間に浸つて居れば、自らその薫染を受けて、その家庭の人の通りになる。各の子供には、その家庭のスタンブが押ししてあるといつてもよい。智育や體育は人格者でなくても、必ずしも行へない事はないが、徳育となると教育者の人格が眞先に立つのである。従つて心ある親は、子の爲に、自分も修養を積むことになるから、或意味に於て子は親の教育者ともいへるのである。

家庭に於ける徳育はいふまでもなく、主として親が行ふのである。子供は模倣性に富み、母親に接することが多いから、いつとなしに親の言動を眞似る。言語の抑揚、身のこなし方などよく親に似るものであるが、道徳的品性は一層よく似るやうである。それで親は子の模範たるべく、



居常その言行を慎しまねばならぬ。德育には子が親を尊敬し、信用することが必要である。如何に親が威張つて見ても、その行が良くなければ、子の尊信を得ることはできない。子が親を輕んずる如きことあらば、如何に親が説き、わめき、威嚇したところが、何の役にも立たない。かなれば親は教育的破産者である。子の尊信は、親が權利として要求したところが、得らるべきものではなく、尊信に値する行をすれば、自ら得られるのである。徳は耳より入らずして目より入るといはれるのは、實行の大切なことをいつたのである。

言動の始終一貫して統一のあることは、人格の要件である。それ故、親はその言動に矛盾のないやうにせねばならない。矛盾すれば、子はその適從する所を知らない。親が餘り酒を飲んで、醜態を子に見せる如きも、德育のふち毀しである。又父母は子の教育上其歩調を一にし、兩々相和し相敬せねばならぬ。男子の婦人に對する態度は、大概父の母に對する態度の見學に由つて、男の兒に決定するのである。

婦人は感情が強く、氣分にむらができ易いから、よく注意して、何時も同じやうに子供を取扱

ひ、又どの子供にも公平であらねばならぬ。それには母が、身體が健全で快活であることが望ましい。ヒステリーの母だと、子も神經質になる。

父母の外、兄弟姉妹も德育上大なる影響がある。兄姉を見ならひ、弟妹をいたはり、互に相睦び、相助けて行けば、その中に自ら徳性も養はれるのである。

家庭に立派な人物がよく訪問して、それに接する間に、禮儀、挨拶、接待の様子などを見學し、その人の感化を受けることも、德育上閑却すべからざることである。即ち家庭が良くて、父母の交友に立派な人のあるは望ましいことである。

活きた人に接する外、古今東西の模範的人物を紹介することも結構である。それには、壁に人物の肖像畫を掛けておくのもよい。子供は始終見て居る中に、自らその人を知り、又その人の話をしてやれば一層の刺戟となる。獨り道徳家に限らず、哲學者、科學者、美術家、音樂家等の肖像畫や寫眞を、時々掛けかへて示すので、子供は顔を見れば誰といふことを知つて居る。間接ながら偉人に接することは、教育上良い事と考へるのである。又人物の傳記、自叙傳などを備へて



おけば、子供はいつとなしに讀む。これも子供の年齢によつて、書物の選擇を要する。

以上は徳育の方法に關することであるが、徳育の全體に互つて必要なことは、子供を尊重することである。子供を玩弄物の如く取扱ひ、大人の慰み者の如く考へて居る親があるが、これは最も誤つたことである。人が訪問すると、子供を馳走に出して、色々評し合つて笑つたり、厭がるのを強いて藝をさしたりするのはよくない。人から足らぬ所を笑はれれば、子供だつて好い氣持はしない。しくじつたりすると尙ほ笑はれる。泣き出すと、一層笑はれる。それが大人であつたら、失禮であるやうなことをも、子供に對しては平氣とする。これはいかな事である。子供に對する態度は根本に於て眞面目であらねばならぬ。これを嘲笑したり、侮蔑したりすることは、決してあつてはならない。子供は人格の芽としてこれを尊重し、子供に自尊心を起さすことが必要である。人から侮られると、自らも侮るやうになる、又子供は誠實正直に育てなくてはならぬ。假そめにも親が嘘を言つてはいけぬ。子供が泣きでもすると、心を轉換さす積りで、ソレ飛行機が來た、お巡査さんが來たなど、有りもせぬことを言ふのは、子を騙すので、甚だよくない。

い。つまり大人に對して、して良くないやうな事は、子供にも大體よくない事であるから、かゝる場合には、これが大人であつたらと願みると、自ら子供に對しても慎み控えるやうにするものである。それでもし子供が嘘を言つたりしたならば、厳しく戒めて、その芽を刈らねばならぬ。況んや大人から嘘の練習をして見せては、良くないに極つて居る。

道徳的品性は、善を行ふ習慣の集成であるから、小さい時から、何事に限らず善い習慣を養ふがよい。樹木でも若芽の時から良く育て、枝ぶりも直さねば、良い木にならぬやうなものである。子供も小さい時は、親の自由になるやうな氣がするが、中學にでも行つて、親より背丈も高く、鴨居に頭がつかへさうになると、自分の子には違ひないが、少し様子が違つて來て、さう是迄のやうに子供扱ひも出來なくなる。それで徳育といふものは、何でも親の言ふ通りになり易い小さい時から、やつておかねばならぬものだといふ事に、始めて氣が付く。しかしその時は、大概は遅いので、しつげに骨が折れて、なか／＼言ふ通りにならない。つまり良い習慣をつけるといふことは、小さい時にするものだといふことが、子供が大きくなると分るのである。子が中學



でも卒業すれば、いつまでも子供扱ひはできなくなるので、その頃になつて、子を訓戒したり、叱責したりしても、餘り効はないのである。ところが世間には小さい時に放任しておいて、その結果が顯はれ出した時に、俄かに慌て、強意見などする親があるが、多くは無効で、却つて子に反抗心を起させ、又は棄鉢にする。新聞などでよくそのやり損ひの記事を見ることがある。教育上の事は大概氣がつく時はもう遅いものだ位に思つて、間に合ふうちに、子供の小さい時に、良くやつておく事が大切であるといふ事を、力強く申したいのである。

以上は家庭教育上自分の多年實行して居ることや、實行したいと希望して居ることを、思ひ出すまゝ書き付けたのであつて、系統的理論的説述ではないから、その積りで讀んで戴きたいのである。

家庭教育の實際終

大正十一年十二月二十五日 印刷  
大正十三年一月十八日 發行

家庭教育

編輯兼發行者

兒童保護研究會

右代表者

東京市下谷區茅町二ノ二四 瀧 恭 三

著作  
非賣  
品

印刷者

東京市小石川區西古川町二五 武藤 正 廣

印刷所

東京市小石川區西古川町二五 中外印刷株式會社

東京市下谷區茅町貳丁目貳拾四番地

發行所

兒童保護研究會

電話下谷三四二六番  
振替東京三八四一一番



271  
110



終

